

学習者のスポーツ属性からみた『関わり合い』の機能

A study on the function of learners' "relationship" in physical education classes

水 上 雅 子¹⁾ 畑 攻²⁾ 榎 並 孝 枝³⁾

Masako MIZUKAMI, Osamu HATA and Takae ENAMI

Abstract

The purpose of this study was to show the function of the learners' "Relationship" in Physical Education Classes. The specially designed questionnaire survey were made on high school and junior high school students. 1838 answers were obtained from the 9 high school and 5 junior high schools. Adequate multiple regression analyses, breakdown and F-test, were applied.

The following results were obtained:

1. The factors that comprise the learners' "Relationship" have evident effects upon the sports characteristics.
2. It also becomes evident that the way the factors influence on the sports characteristics differs from learners' group to group.

keywords : Relationship, function, sports characteristic

I. 研究の目的

近年、わが国における教育のあり方は、人々の価値観や生き方の多様性、子供を取り巻く環境や問題の変化に応じて大きく変動している。今年4月より実施されている学校教育は、平成10、11年に改正された学習指導要領^{19),20)}に基づいており、児童・生徒の『生きる力』を育てることを究極の目標としている。

体育科教育では、より実践的に『生きる力』を育むことができるよう、学習指導要領^{19),20)}の「体操」を『体づくり運動』とし、体力を高める運動と体の気づきや調整、仲間との交流をねらいとした新しい視点の領域『体ほぐしの運動』を取り入れている。また、自己の能力や特性に応じて学習者が運動を選べる『選択制授業』や、学習者が学習者同士で授業を作り上げていく『グループ学習』など、相互作用を中心とした内容を盛んに取り入れている。相互作用とは、「人と人の言語的、非言語的な『関わり合い』」のことである。教師と学習者、学習者同士の相互作用は、教育の場面では必ず存在するものであり、学習者が肯定的に取り組むために

は重要なポイントの一つである。体育科教育では、学習者ひとりひとりが運動やスポーツに自主的・自発的に取り組むことができ、楽しさを知ることができるような授業展開を目指し、そのような相互作用を『関わり合い』と表現して注目している。

ここでの『関わり合い』とは、「共生」「ネットワーク」と類似の意味として使われている。様々な分野で具体的に検討した結果、栗原(1998)⁹⁾の「共生とは、本来異なった生き方をしている生物がかかわりあいながら一緒にいけること」、吉田(1996)²⁸⁾の「人間形成の確立のためには様々な関わり合いを通して、学習しなければならない」など、人間は多種多様なものとの関わり合うことで生きていくことができ、『関わり合い』は生きるために必要不可欠であることが明らかになった。つまり、人が生きていくためには、「人」との関係だけでなく、ひとりひとりを取り巻く「環境」との関係も重要であるという基本的な概念が明らかである。

実際の学校体育の授業における『関わり合い』については、宇土(1993)²³⁾は、学習者が運動・スポーツの楽しさや喜びを主体的に感じるためには、「学習者ひとりひとりがスポーツ観をもち、その時期その時期の自分の健康・体力や生活事情、自分の身の回りを取り巻くスポーツ環境との関わりをもつことである」とし、「教

1) 日本女子体育大学 (非常勤講師)

2) 日本女子体育大学 (教授)

3) 日本女子体育大学院 (大学院生)

師」や「学習者同士」など「人」との関わりだけでなく、学習者ひとりひとりを取り巻いている「環境」の必要性を示している。さらに宇土(1983)²³⁾は、学習者に対して授業に必要な要素として「教師」「内容」「学習集団」「施設用具」「学習計画」の5つを具体的に挙げた「体育授業の構造」を示しており、ここに学校体育の授業における『関わり合い』の基本を見出すことができる。

林⁴⁾は、この5つの要素を『関わり合い』の定義とし、学校体育の授業における『関わり合い』の構造を明らかにしている。中学生を対象に調査を実施し、妥当性を検討するために因子分析を行った結果、3因子が抽出された。第1因子は「自分に合った練習方法を見つけることができる」「計画的に学習を進めることができる」「施設・用具の使い方を工夫して使うことができる」「自分たちに合った計画を立てることができる」「作戦やルールを工夫して行うことができる」などこれらの項目は、学習者が自主的・自発的に取り組むための環境の重要性を意味しており、『学びの環境』と命名している。第2因子は、「仲間の意見をよく聞く」「仲間を励ますことができる」「協力して練習やゲームをすることができる」など学習者同士のよりよい関係を意味しており、『仲間集団』と命名している。第3因子は、「先生に何でも質問することができる」「先生に心を開いて話すことができる」であり、これらの項目は教師とのよりよい関係を意味しており、『教師とのコミュニケーション』と命名している。

また、この結果を宇土の「体育授業の構造」と比較・検討し、「教師=『教師とのコミュニケーション』」「学習集団=『仲間集団』」「内容・施設用具・学習計画=『学びの環境』」に位置づき、理念的な形として教師の立場からではなく、現在の学習者からみた『関わり合い』の構造であり、自主的・自発的に取り組む授業を展開させる具体的な内容であることを明らかにしている。

本研究では、学習者からみた学校体育の授業における『関わり合い』に焦点を当て、体育授業の成果に果たす機能を比較・検討する。授業の成果とは、究極の目標は『生きる力』を育てることであり、水上(1999)¹³⁾は、スポーツ属性が肯定的な学習者ほど学校体育の授業における『生きる力』が育っていることを明らかにしている。よって、学習者ひとりひとりのスポーツ属性を高める授業のあり方が、『生きる力』を育てるといふ基本的な視点に立つことができる。

本研究では、中学・高校生を対象に、先行研究で明

らかにされた『関わり合い』の構造を活用し、学習者ひとりひとりのスポーツ属性に果たす機能を比較・分析し、学習者ひとりひとりが運動やスポーツに自主的・自発的に取り組むことができ、楽しさを知ることができるような授業のあり方を基礎的に考察しようとするものである。

II. 研究の方法

中学・高校生を対象に『関わり合い』の構造を明らかにした林⁴⁾の先行研究を取り上げ、各『関わり合い』因子のスポーツ属性への機能を明らかにするとともに、各学習集団別に比較・考察した。

今回の分析対象とした先行研究の対象・調査方法は以下に示す通りである。

場 所：東京都・富山県・埼玉県・千葉県・神奈川県・新潟県・福岡県の中学・高等学校17校

対象者：1～3年生各1クラスの生徒1838名（回収率90.1%）

日 時：平成13年7月～9月

分 析：統計パッケージ SPSS10.0を用いた。授業の成果と『関わり合い』因子との分析においては、重回帰分析を用い、必要に応じて、T検定、一要因分散分析を行った。

III. 結 果

(1) 対象学習者の基本属性

表1は、対象学習者の基本的属性を示している。この結果は、他の類似の調査報告とはほぼ同じ傾向を示しており、一般的な学習集団であるといえる。

表1 調査対象者の基本属性

特 性	N=1838	
	n	%
中学生	651	35.4
高校生	1184	64.4
不 明	3	0.2

特 性	N=1835	
	n	%
中学男子	315	17.2
中学女子	335	18.2
高校男子	487	26.5
高校女子	694	37.8
不 明	4	0.3

表2 調査対象者のスポーツ属性

特 性	中学男子	中学女子	高校男子	高校女子	全体	χ^2 検定
	N=315 f(%)	N=335 f(%)	N=487 f(%)	N=694 f(%)	N=1831 f(%)	
スポーツの得意・不得意						DF=12 P<0.001
得意である	114(36.1)	76(22.7)	192(39.4)	170(24.5)	552(30.1)	
それほどでもない	158(50.2)	172(51.3)	242(49.7)	374(53.9)	946(51.7)	
不得意である	43(13.7)	86(25.7)	52(10.7)	149(21.5)	330(18.0)	
不明	0(0.0)	1(0.3)	1(0.2)	1(0.1)	3(0.2)	
体力に自信がある						DF=12 P<0.001
ある	57(18.1)	45(13.5)	94(19.3)	95(13.7)	291(15.9)	
どちらともいえない	151(47.9)	179(53.4)	233(47.8)	365(52.6)	928(50.7)	
ない	106(33.7)	111(33.1)	160(32.9)	232(33.4)	609(33.3)	
不明	1(0.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(0.3)	3(0.1)	
学校体育授業がすき・嫌い						DF=12 P<0.001
好き	183(58.1)	144(43.0)	216(44.4)	290(41.8)	833(45.5)	
どちらともいえない	111(35.2)	141(42.1)	212(43.5)	303(43.7)	767(41.9)	
嫌い	21(6.7)	50(14.9)	58(11.9)	99(14.3)	228(12.5)	
不明	0(0.0)	0(0.0)	1(0.2)	2(0.2)	3(0.1)	

(2) 対象学習者のスポーツ属性

表2は、対象学習者のスポーツ属性を示している。

スポーツの得意・不得意では、「得意である」が30.1%、「それほどでもない」が51.7%、「不得意である」が18.0%と「それほどでもない」が過半数を占めた。中高男女別で比較すると、「得意である」では中学男子が36.1%、高校男子が39.4%、中学女子が22.7%、高校女子が24.5%であり、男子がやや高い割合を示している。「不得意である」では、中学男子が13.7%、高校男子が10.7%、中学女子が25.7%、高校女子が21.5%と、女子がやや高い割合を示している。

体力の有・無では、「ある」が15.9%、「どちらともいえない」が50.7%、「ない」が33.3%と「どちらともいえない」が過半数を占めた。「ある」で中学男子が18.1%、高校男子が19.3%、中学女子が13.5%、高校女子が13.7%と、男子がやや高い割合を示しているが、どの集団もほぼ同じ割合を示している。

学校体育の授業における好き・嫌いでは、「好き」が45.5%、「どちらともいえない」が41.9%、「嫌い」が12.5%と「好き」と「どちらともいえない」がほぼ同じ割合を示している。「好き」では、中学男子が58.1%と約6割の高い割合を示し、「嫌い」では中学女子14.9%、高校女子14.3%と、全体より高い割合を示している。また、高校女子のみ、「好き」41.8%より「どちらともいえない」43.7%が高い割合を示している。

(3) 『関わり合い』因子の各スポーツ属性に対する機能

『関わり合い』因子が、学習者のスポーツ属性にどのように機能するかは、効果的・合理的な学校体育の授業を展開する上で、重要な課題の一つである。ここでは、各スポーツ属性に対する『関わり合い』因子の機能を検討した。各スポーツ属性を目的変数、『関わり

合い』因子を説明変数として重回帰分析を行い、比較・検討した。ここでのスポーツ属性は「スポーツの得意・不得意」、「体力への自信の有無」、「体育授業の好き・嫌い」を用いた。なお、ここでの重回帰分析で得られた標準偏回帰係数は、因子分析での因子負荷量の極性と一致している。よって、標準偏回帰係数が正の場合、その因子に対する評価が学習者のスポーツ属性に肯定的に作用し、係数が負の場合は、否定的に作用していることを示している。

① スポーツの得意・不得意

表3は、『関わり合い』因子が、スポーツの得意・不得意に対する規定力を示している。ここでは、「学びの環境」がプラスに強く影響し、「仲間集団」がマイナスの影響があることを示している。

表4、5、6、7は、中高男女別に『関わり合い』因子が、スポーツの得意・不得意に対する規定力を示している。「学びの環境」は全ての集団においてプラスに強く影響し、「教師とのコミュニケーション」は中学女子・高校女子においてプラスに影響し、「仲間集団」は中学女子でマイナスの影響を示している。

表3 スポーツの得意・不得意における規定要因比較：全体

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.48195	219.60900 ***	1
F2: 仲間集団	-0.08989	9.01190 ***	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.03848	2.01886	
重相関係数	0.447219		
分散比	152.8380 ***		

*** P<0.001

表4 スポーツの得意・不得意における規定要因比較：中学男子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.56062	48.27650 ***	1
F2: 仲間集団	-0.07878	1.15893	
F3: 教師とのコミュニケーション	-0.04121	0.38884	
重相関係数	0.481087		
分散比	31.2185 ***		

*** P<0.001

表5 スポーツの得意・不得意における規定要因比較
：中学女子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.51364	45.10210 ***	1
F2: 仲間集団	-0.14609	4.40035 **	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.14338	4.64218 **	3
重相関係数	0.52291		
分散比	41.5228 ***		
		*** P<0.001	** P<0.01

表6 スポーツの得意・不得意における規定要因比較
：高校男子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.33439	28.30470 ***	1
F2: 仲間集団	0.04957	0.77945	
F3: 教師とのコミュニケーション	0.07304	1.92170	
重相関係数	0.418834		
分散比	34.2513 ***		
		*** P<0.001	

表7 スポーツの得意・不得意における規定要因比較
：高校女子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.040416	54.27430 ***	1
F2: 仲間集団	-0.03009	0.35084	
F3: 教師とのコミュニケーション	0.09179	4.56066 **	2
重相関係数	0.443356		
分散比	56.2706 ***		
		*** P<0.001	** P<0.01

表8 体力への自信の有無における規定要因比較：全体

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.44819	178.09400 ***	1
F2: 仲間集団	-0.12848	17.26100 ***	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.02456	0.77130	
重相関係数	0.383247		
分散比	105.2510 ***		
		*** P<0.001	

表9 体力への自信の有無における規定要因比較
：中学男子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.42179	24.75270 ***	1
F2: 仲間集団	-0.11117	2.09053	
F3: 教師とのコミュニケーション	0.06049	0.75894	
重相関係数	0.38927		
分散比	18.5142 ***		
		*** P<0.001	

表10 体力への自信の有無における規定要因比較
：中学女子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.49428	39.35530 ***	1
F2: 仲間集団	-0.12471	3.02151 *	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.09329	1.85183	
重相関係数	0.478456		
分散比	32.7561 ***		
		*** P<0.001	* P<0.05

表11 体力への自信の有無における規定要因比較
：高校男子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.37320	32.59420 ***	1
F2: 仲間集団	-0.06747	1.33534	
F3: 教師とのコミュニケーション	0.00467	0.00725	
重相関係数	0.328784		
分散比	19.5133 ***		
		*** P<0.001	

② 体力への自信の有無

表8は、『関わり合い』因子が、体力への自信の有無に対する規定力を示している。「学びの環境」がプラスに強く影響し、「仲間集団」がマイナスに影響力していることを示している。

表9, 10, 11, 12は、中高男女別に『関わり合い』

表12 体力への自信の有無における規定要因比較
：高校女子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.48180	73.52110 ***	1
F2: 仲間集団	-0.15183	8.51480 ***	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.02170	0.24299	
重相関係数	0.396376		
分散比	42.8720 ***		
		*** P<0.001	

表13 学校体育の授業の好き嫌いにおける規定要因比較
：全体

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.31320	97.47840 ***	1
F2: 仲間集団	0.08206	7.89360 ***	3
F3: 教師とのコミュニケーション	0.15435	34.13870 ***	2
重相関係数	0.488704		
分散比	191.8180 ***		
		*** P<0.001	

表14 学校体育の授業の好き嫌いにおける規定要因比較
：中学男子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.25105	8.53695 ***	1
F2: 仲間集団	0.01867	0.05741	
F3: 教師とのコミュニケーション	0.12386	3.09810 *	2
重相関係数	0.358463		
分散比	15.2848 ***		
		*** P<0.001	* P<0.05

表15 学校体育の授業の好き嫌いにおける規定要因比較
：中学女子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.36136	25.10930 ***	1
F2: 仲間集団	-0.01348	0.04216	
F3: 教師とのコミュニケーション	0.29549	22.17830 ***	2
重相関係数	0.595012		
分散比	60.4718 ***		
		*** P<0.001	

表16 学校体育の授業の好き嫌いにおける規定要因比較
：高校男子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.20170	10.19890 ***	1
F2: 仲間集団	0.17168	9.26157 ***	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.09942	3.52646 *	3
重相関係数	0.328784		
分散比	19.5133 ***		
		*** P<0.001	* P<0.05

表17 学校体育の授業の好き嫌いにおける規定要因比較
：高校女子

	標準偏回帰係数	F値	影響力順位
F1: 学びの環境	0.30030	36.14750 ***	1
F2: 仲間集団	0.18181	15.45160 ***	2
F3: 教師とのコミュニケーション	0.17985	21.12120 ***	3
重相関係数	0.57792		
分散比	115.3410 ***		
		*** P<0.001	

因子が、体力への自信の有無に対する規定力を示している。「学びの環境」は全ての集団においてプラスに強く影響し、「仲間集団」は中学女子・高校女子においてマイナスの影響力を示している。

③ 学校体育の授業の好き・嫌い

表13は、『関わり合い』因子が、学校体育の授業の好き・嫌いに対する規定力を示している。全ての因子がプラスに影響力を示し、「学びの環境」「教師とのコミュニケーション」「仲間集団」の順に関連が強いことを示している。

表14, 15, 16, 17は、中高男女別に『関わり合い』因子が、学校体育の授業の好き・嫌いに対する規定力を示している。「学びの環境」と「教師とのコミュニケーション」は、全ての集団においてプラスに影響し、「仲間集団」は高校男子・高校女子においてプラスに影響力を示し、「学びの環境」「仲間集団」「教師とのコミュニケーション」の順に関連が強いことを示している。

IV. 考 察

対象学習者のスポーツ属性の結果から、対象学習者は、学校体育の授業で運動・スポーツを行うことは嫌いではないものの、自信をもって「得意である」と言えない学習者や、「体力がある」と言えない学習者が多く、自分自身が得意なのか不得意なのか、あるいは体力があるのかないのかなどに対して明確な関心や興味がない傾向がみられた。特に女子にその傾向が強く表れている。これは、自分自身をあまり把握せずに授業に参加している状況であり、体育科教育の基本目標である『生きる力』を育む方向とは同一でない状況である。

各スポーツ属性への『関わり合い』因子の機能分析の結果を総合し、各スポーツ属性に対する『関わり合い』因子がどのように機能しているかをまとめ、比較した結果が表18である。

「学びの環境」は、全ての集団で、全てのスポーツ属性に最も強い影響力を示している。すなわち、「学びの

環境」は、全ての学習者に対して、スポーツ属性を育てるために、最も必要な要素であるという結果を示している。宇土²³⁾も、「『教師』や『内容』の主要素だけでなく、その他の付加的条件が特に重要な要素である」と述べ、「学びの環境」の要素に着目している。

また、「仲間集団」は、高校男子・高校女子において、授業の好き・嫌いに強い影響力を示しているが、スポーツの得意・不得意、体力への自信の有無では、男子にはあまり機能せず、女子にはマイナスに影響力を示している。

授業の好き・嫌いでは、中学生ではうまく機能せず、発達段階が進んだ高校生になってやっと影響力を示している。すなわち、現在の学校体育の授業では、「仲間集団」はうまく機能せず、女子においては逆に否定的に影響する結果となっている。細江²⁴⁾は、「仲間を思いやり、認め合い、共感し、互いに教えあい、励ましあうこと」がより一層深い関係をつくり、よい刺激となりうると述べている。しかし、体育の学習内容によっては、スポーツの得意・不得意、体力の有無がすぐに明らかになり、運動を苦手とする学習者や仲間と比較して否定的にとらえてしまう学習者がいることが考えられる。よって、「仲間集団」をプラスに機能させるためには、学習者の状況に応じて関わる機会を変えることが重要であるものとする。

「教師とのコミュニケーション」は、体力への自信の有無では、どの集団においても全く機能せず、スポーツの得意・不得意では女子に、授業の好き・嫌いでは全ての集団に影響力を示していた。すなわち、授業を好きにさせ、女子にスポーツを得意だと感じさせるためには、教師との良好な関係、一方的な上から下への指導ではなく、「学習者が教師に対して心を開いた、学習者に信頼感を与える」²⁵⁾関係、が必要であることを示している。

以上のことから、「仲間集団」「教師とのコミュニケーション」の『関わり合い』の機能は、学習者によって異なった結果を示しているが、運動の種目・学習内容

表18 スポーツ特性における『関わり合い』因子の機能

	スポーツの得意・不得意					体力への自信の有無					学校体育授業の好き・嫌い				
	全体	中学男子	中学女子	高校男子	高校女子	全体	中学男子	中学女子	高校男子	高校女子	全体	中学男子	中学女子	高校男子	高校女子
学びの環境	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
仲間集団	×		×			×		×		×	○			○	○
教師とのコミュニケーション			○		○						○	○	○	○	○

◎:プラスに一番強く影響力を示している ○:プラスに影響力を示している ×:マイナスに影響力を示している

によっては、『関わり合い』を持つ機会を増やすことで、より自主的・自発的に授業に取り組むことができるものと考えられる。

V. 結 論

本研究では、先行研究の結果を総合し、さらに発展的に分析・考察した。『関わり合い』を構成する各因子が、特に学習者のスポーツ属性に関わる機能を中心に考察した。学習者ひとりひとりのスポーツ属性に果たす機能を比較・考察した。結果は、以下のように要約することができる。

① 体育授業におけるスポーツ属性と『関わり合い』を構成する各因子の関係を分析し、比較・考察した結果、「学びの環境」は、全てのスポーツ属性に最も強い影響力を示し、「教師とのコミュニケーション」は、体力への自信の有無に全く機能せず、「仲間集団」は、全体にうまく機能していないことが明らかになり、各スポーツ属性に対して、特徴的に機能していることが明らかになった。

② 体育授業におけるスポーツ属性と『関わり合い』を構成する各因子の関係を、学習集団別に比較・考察した結果、中学男子は「学びの環境」以外の『関わり合い』因子の機能が弱く、反対に高校男子は体育の授業の好き・嫌いに全ての『関わり合い』因子が強く機能していることが明らかになった。また、女子においては得意・不得意、体力への自信の有無に「仲間集団」がマイナスに機能することが明らかになり、学習集団別に機能が明確に異なることが明らかになった。

これらの結果は、体育授業において、今日重要視されている『関わり合い』のあり方が、学習者の個性としてのスポーツ属性によって大きく異なって機能することを明確に示している。また、基本属性である、男女及び中学・高校などの発達段階によっても『関わり合い』は一樣ではない。すなわち、そのような授業での緻密な関わり合いの適切な調整がより豊かな学習内容とダイナミックな学習活動を可能にすると考えられる。ひとりひとりに応じた方法で、より具体的に検討されることが必要であると考えられる。

引用・参考文献

1) 有馬 哲, 石村貞夫(1988) : 多変量解析のはなし, 東京図書株式会社。

- 2) D. Siedentop : 高橋健夫ほか訳(1998) : シーデントップ体育の授業技術, (株)大修館書店。
- 3) 福島祐子, 高橋建夫, 大友 智, 深見英一郎, 細越淳二(1999) : 子供の学習行動と教師の関わり行動についての検討, 筑波大学体育科学系文部省科学研究費 (基盤研究B) 研究成果報告書75-84。
- 4) 林 園子(2001) : 学校体育の授業における「関わり合い」の構造と機能に関する研究, 日本女子体育大学院平成13年度修士論文。
- 5) 細江文利(1999) : 子どもの心を開くこれからの体育授業, (株)大修館書店。
- 6) 細江文利, 藤谷かおる(1998) : ネットワーク論導入による「関わり合い」重視の学習観における学習プロセスの検討, 体育・スポーツ経営学研究 第14巻第11号。
- 7) Johon. E. Kane : 村山輝志訳(2001) : 学校体育カリキュラムの発展, 不味堂株式会社。
- 8) 木村真知子(1996) : 学校体育の存在根拠を明確にする理論とは, 体育学研究41 : 273-277。
- 9) 栗原 康(1998) : 共生の生態学, 岩波書店。
- 10) 松田岩男, 永島惇正, 杉山重利(1990) : 新学習指導要領による新体育授業の展開, (株)大修館書店。
- 11) 松田岩男, 宇土正彦(1988) : 学校体育用語辞典, (株)大修館書店。
- 12) 松浪健二, 井上誠治(2000) : 体育の目的論に関する研究, 愛媛大学教育学部保健体育紀要3 : 55-59。
- 13) 水上雅子(1999) : 体育授業における学習者の生きる力に関する研究, 日本女子体育大学院平成11年度修士論文。
- 14) 文部省 中学校課高等学校課(1995) : 中等教育 資料。
- 15) 文部省(1977) : 小学校学習指導要領。
- 16) 文部省(1989) : 高等学校学習指導要領。
- 17) 文部省(1989) : 小学校学習指導要領。
- 18) 文部省(1998) : 小学校学習指導要領。
- 19) 文部省(1998) : 中学校学習指導要領。
- 20) 文部省(1999) : 高等学校学習指導要領。
- 21) 中田基昭(1993) : 授業の現象学—子どもたちから豊かに学ぶ—, 東京大学出版会。
- 22) ルイス・トマス : 石館康平, 石館宇夫訳(1996) : 人間というこわれやすい種, 株式会社昌文社。
- 23) 宇土正彦(1993) : 体育授業五十年, (株)大修館書店。
- 24) 宇土正彦, 高橋 稔, 永島惇正, 高橋建夫(1997) : 体育科教育法講義, (株)大修館書店。
- 25) 宇土正彦(1988) : 体育科教育入門, (株)大修館書店。
- 26) 宇土正彦, 阪田高彦, 高橋建夫, 細江文利(1995) : 学校体育授業事典, (株)大修館書店。
- 27) 山下秋二, 畑 攻, 富田幸博(2000) : スポーツ経営学, (株)大修館書店。
- 28) 吉田 茂, 三木四郎(1996) : 教師のための運動学, (株)大修館書店。

(平成14年9月24日受付)
(平成14年11月21日受理)